

中小企業地域資源
活用促進法に基づく

わがまち
ふるさと名物
これ！

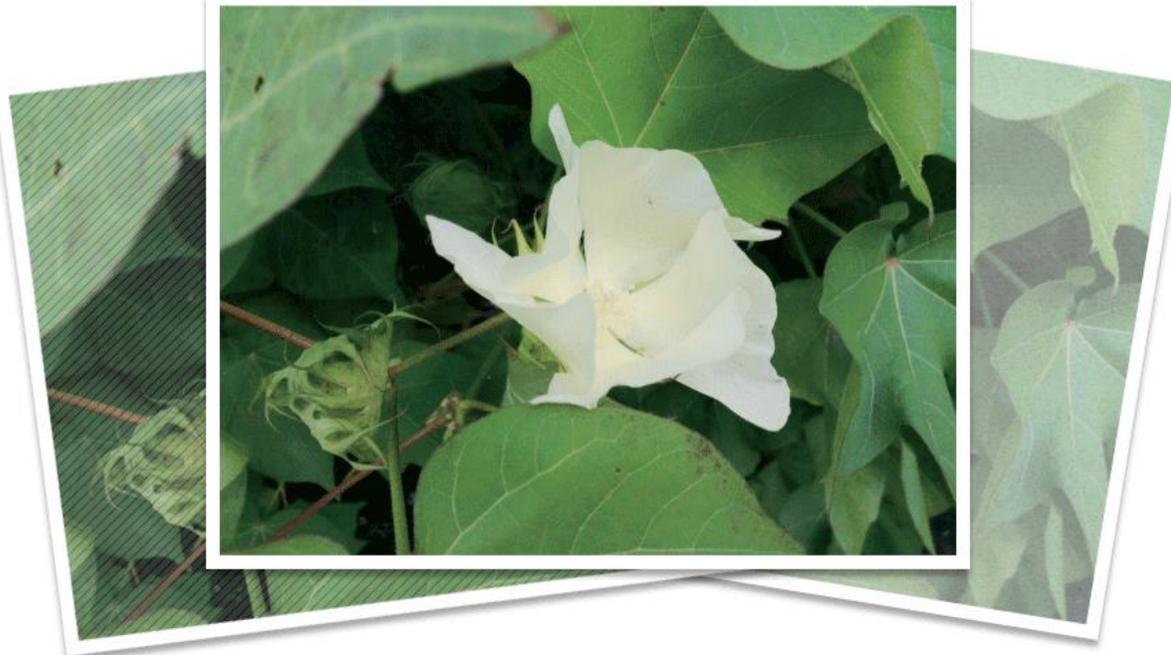


ふるさと名物
Furusato Meibutsu

兵庫県加古川市
が応援するふるさと名物

かこがわ × コットン

||
かこっとん



Made in Perfect Kakogawa Cotton





ふるさと名物
Furusato Meibutsu

応援宣言

兵庫県加古川市

地域の プロフィール

加古川市は兵庫県南部の播磨灘に面し、播磨平野を貫流する一級河川加古川の河口に広がる豊かな自然に囲まれた地域に発展してきました。

江戸時代には、加古川宿がおかれ西国街道の宿場町として発展し、明治時代以降は、農業と漁業中心のまちから軽工業のまちとして栄えました。さらに昭和40年以降、播磨臨海工業地帯の拠点として重工業のまちへと変わり、東播磨地域の中核都市として発展してきました。

現在、市内にはJR西日本の山陽本線（JR神戸線）と加古川線、そして山陽電鉄の本線が通っています。また、国道2号線、国道2号バイパス及び国道250号線といった幹線道路が中南部を横断し、北部には山陽自動車道が通るなど、交通の便がよく、神戸市、姫路市のベッドタウンとして発展しています。

加古川市は平成14年には特例市に指定され、「いつまでも住みたいウェルネス都市 加古川」を将来の都市像として掲げています。古来より受け継がれてきた自然・歴史・文化を大切にしながら、都市的な利便性をも兼ね備えたまちづくりに取り組み、安全で安心して暮らせる「いつまでも住みたいウェルネス都市 加古川」の実現を目指しています。



一級河川「加古川」



志方東コスモスまつり

1 主な地域資源

◆「メイド・イン・かこがわ」のコットン（綿花）

かつて全国有数の綿花産地であった本市の北部地域（志方町周辺）の一角で、地元農家による綿花栽培が始まりました。平成26年度には約30アール（3,000㎡）であった農地での綿花栽培面積は、翌27年度には約140アール（14,000㎡）に広がりました。なお、約140アールのうちの約100アール（10,000㎡）の作付けを農家が行いましたが、この農家による作付け面積は全国一を誇るものです。現在は、地元農家だけでなく、地域住民による綿花栽培も行われるなど、“コットン”による地域活性化は広がりを見せています。

また、志方町を含む市北部地域では高齢化・人口減少による低未利用資源の増加が地域課題となっています。この事業では、放棄田や休耕田が栽培地として活用され、また、地元住民の協力のもと収穫祭が開催されるなど、市内の産業振興と地域コミュニティの強化の両面に寄与しています。

※かこがわコットンプロジェクトは、平成25年度に、大正紡績(株) 近藤健一氏と神戸大学大学院 藤岡秀英教授の2人をアドバイザーに迎え、地元営農組合の組合員や靴下産業関係者等が集う研究会から始まった事業です。綿花栽培は徐々にではありますが広がりをを見せています。今後は、地域ブランドとしての「かこがわのコットン」を全国に発信していきます。

【加古川流域における綿花栽培の歴史】

江戸時代、姫路藩はこの地域で栽培が盛んであった「綿花」に着目しました。やがて江戸への木綿専売が認められたことにより、加古郡・印南郡（主に現在の加古川市域）の農民が生産した木綿を糸にし、反物に織り、木綿商人がそれを買い集め、生産地問屋から、姫路城下の江戸積問屋へ売り渡されることで、大きな財を得ることにつながり、この頃から綿製品の流通に必要な業者や知識が備わっていました。



収穫した綿花



綿花畑



アドバイザーを招いた研究会の様子
(平成25年度)

2

ふるさと名物

◆かこっとん（かこがわ×コットン）が生み出す、“Ethical（エシカル）”な商品群

かこがわコットンプロジェクトにおける商品化の第一弾として、化学染料を一切使用していない加古川産綿花100%の靴下が作られ、JR加古川駅前にある靴下のアンテナショップ「かこがわ工房 Kips」などで販売されています。

今後は、平成27年11月に設立された「かこっとん株式会社」を中心に、地域の繊維製品製造業及び食品製造、製紙業、小売業などの多様な企業とも連携・協力することで、繊維製品に加え、綿実油やコットン紙などについても加古川産綿花を原材料にした「メイド・イン・かこがわ」の商品として、環境や社会に配慮した“エシカル”な活動により展開します。
※原材料となる綿花の栽培だけでなく、製品化から販売までの全ての工程においてエシカルな商品づくりを目指しています

※Ethical：環境配慮の「エコ」、健康と環境を志向する「ロハス」といった価値観に加え、「地域再生や社会の課題解決などに貢献できる」という倫理的な価値観。近年、欧米を中心に世界的に広がってきている消費のスタイル



コットン靴下の試作品



アンテナショップ「かこがわ工房 Kips」



収穫体験の様子（平成26年）

1

農商工連携

◆「かこっとん」における派生商品の開発・販売

このプロジェクトにより生まれた商品に「かこっとん〇〇」の商標を付けるとともに、地域の繊維製品製造業者等のほか、エシカルな活動に取り組む多様な企業との連携・協力することで、新商品の開発や販路の拡大を図っています。



【商品例】

- かこっとん靴下
- かこっとん綿実油
- かこっとんペーパー
- かこっとんと融合した衣料製品

【展開例】

- 百貨店
- かこっとん×食品会社
- デザイナー



2

観光

◆“コットン・ツーリズム”という加古川地域を巻き込んだ着地型観光への展開

かこっとんの産地「加古川」の魅力発信と、かこっとん商品の“ファン”づくりに向けた取り組みを進めています。

【展開例】

- 綿関連産業工場見学
- 綿摘み体験、収穫祭
- コットンウォーク&ライド



支援策

①

◆ふるさと納税（寄附金）の記念品

加古川市を応援いただける方を通じ、売上向上と販路の拡大を図っています。

【特長】

原材料となる綿づくりから、紡績や靴下の製造に至るまでの全ての工程において、自然環境や労働環境に配慮した「メイド・イン・かこがわ」の靴下です。

・靴下セット5足（紳士用または婦人用）

※1回につき2万円以上を寄附された方にお選びいただけます

※平成27年12月現在



Kacotton（かこっとなくつ下）

支援策

②

◆かこがわコットンプロジェクト支援事業 （地域人づくり事業）

【目的】

靴下製造業者が地元農家の栽培した綿花を原材料に、付加価値の高い製品の開発や製造・販売する仕組みづくりを支援することで、地域ブランド力を向上させ、地場産業である靴下産業等の振興を図るとともに、従事する者の労働環境の充実等を目指します。

【取り組み例】

- ・藻谷浩介氏 講演会
～里山資本主義から考えるコットンプロジェクトと加古川の未来～
- ・新商品販売会（東急ハンズ三宮店、モザイク（神戸ハーバーランド）など）
- ・JFW インターナショナル・ファッション・フェアへの出展（東京ビッグサイト）



JFW インターナショナル・ファッション・フェア（平成27年7月）

支援策

③

◆市内小中学校園（全61校）へ綿花の種を配付

平成27年は市内での綿花栽培普及のため小中学校園（全61校）へ綿花の種を配付し、各学校や家庭での栽培を後押ししました。また、児童による栽培や収穫の様子などが各新聞等のメディアに取り上げられました。



西神吉小学校の児童
（平成26年3月）



上荘小学校の児童
（平成27年6月）



収穫体験祭の様子
（平成27年11月）

【主なメディア掲載実績】

- 平成24年 8月16日神戸新聞 「休耕田から綿花復活」
- 平成25年 4月 6日朝日新聞 「播磨の綿花 めざせ再興」
- 平成25年 5月17日NHK神戸 ぐるさとキャラバン「地場産業 靴下の新たな挑戦」
- 平成26年 9月11日神戸新聞 「木綿の靴下完成 岡田市長へ報告し寄贈」
- 平成26年10月20日神戸新聞 「綿摘みに50人が挑戦」
- 平成27年 7月28日神戸新聞 「地場産コットンPR一丸 業者団体、知事に協力要請」
- 平成27年11月11日織研新聞 「再生に向け新たな始動 かこっとんプロジェクトが本格化」

市長応援メッセージ

加古川市は、人口減少・少子高齢化といった課題克服と、「いつまでも住み続けたいウェルネス都市 加古川」の実現を図るため、平成27年10月に「加古川市まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定いたしました。

今後戦略の実施にあたっては、地域住民が自ら考え、地域が一体となって継続的に行う取組が求められます。この「かこがわコットンプロジェクト」は、市民参加型のまちづくりそのものであり、地域経済の好循環にもつながる、まさに“地域創生”のモデル事業であります。

今回、農業者、靴下産業関係者、市民などの地域が一丸となって実施していく「かこがわコットンプロジェクト」を積極的に支援するとともに、本市における地域ブランドの確立を図ることにより、市民のふるさと意識や郷土愛の醸成に努めます。

以上のように、本市では、加古川で栽培された「コットン（綿花）」とそれを活かした取組を「ふるさと名物」として応援することを宣言します。

加古川市長 岡田 康裕

